24年度 総括　　厚田地区防災計画　避難訓練 検証取りまとめ

H 24. 12. 17取りまとめ

A	B	C	D	E	F	G			H		
地　区	開催状況 ( )訓練参加者	世 帯 数 町内会数	要援助者数 23.12末現在	収容避難所 （海抜）	備 蓄 品 保管場所	一 時 避 難 場 所 （野外） （海　抜）			検 証 結 果 詳 細 内 容 ① 検 証 結 果	② 危 険 箇 所	③ 理 想 の 姿
厚　田	3 回	337 世 帯	29 人	厚田中学校	厚田中学校	みよし園（22m）	厚田火葬場（25m）	支所別館（13m） （旧在介支援ｾﾝﾀｰ）	・一時避難場所「みよし園」は中学校へ一本化すべき（浜町・潮見町） ・中央団地避難経路を北側へ変更すべき（潮見町） ・小学校横階段は高齢者は無理（仲良町） ・冬場の事も考え今後訓練すべき ・冬期における道の除雪が気になった	・厚田神社石積みブロック ・ケアハウス迄の国道 ・市道の法面崩落（別狩中央線） ・国道横断注意	・水の確保（ろ過する機器があれば） ・国道に歩道が欲しい（別狩側） ・山口宅からケアセンターに向かう避難路の整備（別狩南） ・小山横から小林宅までの階段整備（神明町） ・日頃からの備えを各自すべき ・大型発電機があると良い
	66 (40) 名	13 町内会		20m	2F（空き教室）	正眼寺（10m）	ケアハウス別狩 （29m） 厚田浄水場（63m）	下発足神社(35m)			
古　潭	0 回	51 世 帯	0 人	新厚商事 （沢田建設）	新厚商事	各自裏山高い場所へ	嶺 泊 高 台 宮川宅（30m）	旧国道高台（43.5m）			
	0 名	7 町内会		36m	2F（事務所）						
望　来	2 回	175 世 帯	40 人	戸田墓園	戸田講堂	各自裏山高い場所へ	桂沢分譲地（40m） 広岡宅裏山（24m）	旧望来火葬場（24m） 札幌霊園(60m)	・高齢者の対応が課題 ・非常事態を知らせるサイレンの活用 ・一時避難場所はペット霊園の方が近い世帯あり（第一） ・一時避難場所をフラトマリへ（更生） ・情報収集と状況判断が大切と感じた ・夜間、冬期間の避難課題 ・収容避難所を聚富小中学校へ（夕やけ） ・一時避難所をガンビダイラから分譲地へ（正利冠中央）	・交通車両に注意（本沢西） ・市道交通量が多く危険（望来嶺泊線）	・津波に備え各自ライフジャケットを準備しては…（アイディア） ・家族間で連絡のとり方を確認することが大切 ・備蓄品は各自でも準備すべき
	40 (27) 名	10 町内会		36m	1F （旧管理者室）	旧道柴田宅（49m） 秋村裏分譲地(26m) ペット霊園(17m)	神社裏山(30m) 望来坂上(67m) フラトマリ(50m)	道々望来当別線奥 (33m) 望ケ丘線（50m）			
聚　富	2 回	248 世 帯	41 人	聚富小中学校	聚富小中学校	聚富会館（70m）	虹が原会館（5m）	ゆ め 広 場（3m）	・トーメン団地から国道へ出るのが渋滞 ・高齢者の対応が課題 ・情報収集が大切 ・実際に起きた時訓練のようにできるか不安 ・二時避難場所は必要なし（虹が原） ・橋が渡れない場合を想定した訓練も必要 ・冬場の訓練は必要		・情報伝達の仕組みづくりを考えるべき ・雪の圧雪をスノーモービルでできないか ・短時間、最短の経路で高い所へ逃げることを考えることが重要 ・高台に住んでいる人は避難誘導などの役割をはたすべき
	57 (39) 名	8 町内会		60m	体育館・夢広場前スペース	タック前駐車場広場 （5m）	稲香家前駐車場広場 （5m）				
発　足	0 回	28 世 帯	2 人	発足会館	発足会館	各自裏山高い場所へ					
	0 名	1 町内会		60m							
濃　昼	2 回	17 世 帯	5 人	厚田中学校	濃昼会館	国道231号駐車帯 （25m）	濃昼神社（14m）	濃昼墓地（25m）	・橋が心配（地震に耐えられるか） ・神社は土砂災害区域 ・橋が安全であれば車両にて国道駐車帯へ避難すべき ・冬期間の市道吹き溜まりが心配 ・濃昼墓地までの草刈りが必要	・北側の法面は土砂災害指定区域	・濃昼墓地にプレハブ小屋があればよい（避難所兼備蓄品保管場所）
	10 (6) 名	2 町内会		20m							
計	9 回	856 世 帯	117 人	5 施 設	6 施 設	今　後　の　展　開			検 証 結 果 ま と め		
	173 (112) 名	41 町内会				①町内会単位で（総会時等）居住者台帳の確認を行い、更新を図る ②今後も避難訓練を実施し検証を重ね、策定された計画内容の見直しを図り、より良い計画へと さらに進化させ つくり替え、育てながら、防災意識の高揚を図る			・一時避難場所の再検討（厚田、望来、聚富） ・高齢者の対応が課題 ・冬場の訓練が必要 ・橋が渡れない場合を想定した訓練も必要 ・サイレンの活用 ・情報収集と状況判断の大切さ	・国道、市道の交通車両 ・土砂災害指定区域	・情報伝達の仕組みづくり ・家族間での話し合い ・各自でも備蓄品を準備すべき ・高台に住んでいる人は避難者のサポート役を担うべき ・水、電気、冬期間の道路確保に向けた対策 ・津波に備え、ライフジャケット